キリストをただ信じ、
神の約束の相続人となる

ガラテヤ3章15～29節
2021年11月14日
松田 基子 師

新聖歌の182番に、
『ただ信ぜよ』
という信仰の歌があります。 この、「ただ信ぜよ」という聖歌は、最近あまり歌われませんが、私が小学生の頃、昭和30年（1955年）頃迄はよく歌われました。 路傍伝道時代、先達たちは、路傍に立ってこの「ただ信ぜよ」を歌って、道行く人の足を止めました。 そこで、「ただ信ぜよ」の聖歌は、多くの人々が知るところとなりました。そのために、巷では、教会やクリスチャンのことを、
『アーメンさんとか、ただ信ぜよ』
と呼ばれたものです。

教会は何故、未信者さん達に向かって「ただ信ぜよ」の聖歌を歌ったのでしょうか。 この聖歌は、キリスト信仰を簡潔に言い表しています。
1番：
十字架にかかりたる、救い主を見よや。
こは汝が犯したる、罪のため、
ただ信ぜよ、ただ信ぜよ、
信ずる者は誰も、皆救われん。
2番：
死よりよみがえりし、いのちの主知らずや。
罪に死せる人よ、今仰げ。
3番：
イエスは罪のために、苦しめる者をば
憐れみて救わんと、 招き給う。
4番：
罪より救われて、限りなきいのちを
望む者はイエスに、今すがれ
ただ信ぜよ、ただ信ぜよ、
信ずる者は誰も、皆救われん。
キリスト教信仰の真髄を一言で言おうとするならこの、
『ただ信ぜよ、ただ信ぜよ、
信ずる者は誰も、皆救われん。』
と言うことができます。 キリスト教信仰は、真の救い主、イエス・キリストを信じる信仰のみで救われます。 この真理を体系的に打ち立てたのはパウロです。

パウロは元々、キリスト教の母胎であるユダヤ教徒であり、ユダヤ教に精通し、律法を非の打ち所がないまでに、忠実に熱心に守って、神様に受け入れられようとした人です。 その結果が律法に支配されて、キリスト者を、神様を冒涜する人々だと思い込み、迫害しました。

そのパウロに、復活して天に帰られたキリストは、天から声を掛けられ、
「**サウル、サウル、何故私を迫害するのか**」と問われました。 パウロはそこで、イエス・キリストこそ、神様がお遣わしになった真の救い主であることに、心の目が開かれました。 聖書に精通していたパウロは、聖霊の助けによって、
『真の救い主は、人々の罪を負って、神様に執り成して下さるお方であり、人間は全て、罪人であり、救い主を信じて、全存在を委ねる、つまり、ただ、**信じる事によってのみ**、救われる』
という、**神様の奥義**を得たのでした。

しかし、この事は、長いユダヤ教の歴史を受け継いだ、ユダヤ人キリスト者には、理解困難なものでした。 ユダヤ教の信仰の歴史は、先祖アブラハムが、神様に聴き従ったことから、神様の民となる契約の徴に、男子は生まれて8日目に割礼を受けました。 後に神の民として守るべき事が、モーセを通して律法として、与えられました。 ユダヤ人にとっては、
『割礼を受けて、律法を守るという事が、神様を信じている証であり、また、選民としての誇りでした。』
ユダヤ教から、キリスト教に改宗した人々は、イエス様の十字架の贖いを信じたのですが、ユダヤ教の割礼と律法を捨てることが出来ませんでした。

パウロにとって、それはイエス様の**十字架を無駄にする**、致命的な間違いでしたので、紀元49年に、エルサレムに行って、使徒会議を申し入れ、教会の柱である、ヤコブ、ペトロ、ヨハネと、他の使徒達の理解を得て、ユダヤ主義キリスト者が主張する、

『異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ。』

と言う主張は退けられました。

パウロはその後、第二回伝道旅行に、出発しますが、一方、エルサレム教会のユダヤ主義キリスト者たちは、

『神様がモーセを通して与えられた律法』

であり、これを守ることに、人生を賭けて来ましたから、律法を抜きにして、神様が自分達を認めて下さるとは、考えられませんでした。 そのために、

『反パウロ運動』

を考えたのです。 彼らは、異邦人も、

『イエス・キリストを信じるだけでなく、モーセの律法を守らなければ救われない。』

と考え、

『自分達の考えが正しい。』

と思い込んで、パウロが伝道して設立した教会に、その事を教えに廻りました。 彼らは、パウロの存在が気に入りませんでした。 伝統にしがみつく人は、伝統に逆らう人が気に入らないし、赦す事が出来ません。 気に入らないと相手を非難する材料はいくらでも見つかります。

第一パウロは、地上のイエス様の弟子ではありませんでした。 一方エルサレム教会のリーダーであるヤコブは、イエス様の地上での、肉親の弟です。自分達は、そのヤコブに繋がっている者として、正当性を主張しました。 彼らは、

『使徒と言うのは、ヤコブ、ペトロ、ヨハネを初め、イエス様の正当な弟子達を言うのであって、パウロは使徒ではない。』

とけなして、そのことから、パウロが語っている**キリストのみ、信仰のみ**による救いは、いい加減だ、不十分だと覆しに廻ったのです。

彼らは、現在のトルコ、当時のガラテヤ地方にパウロが設立したピシディア州のアンティオキア、イコニオン、リストラ、デルベにある教会へ行き、

『パウロの使徒職の不当性、パウロが教えた、イエス・キリストを信じる、信仰のみによる信仰の不十分さを訴え、律法も守らなければ、つまり、善い行いもしなければ救われない。』

と真剣に教えました。

ガラテヤ地方の信徒さん達は、動揺しました。パウロ先生の言う事を信じて、イエス・キリストを信じる信仰のみに委ね、信じ切って喜んでいたけれども、そう言われて見れば、それは余りに虫が良すぎると思われました。 やはり、律法を守って、良い行いをしなければ、神様は赦して下さらないと言う方が納得できました。 ガラテヤの信徒さんの考えが変わってきました。 でも、人間良いことをしたいと心で思っても、出来ないものです。 次第に彼らにとって神様は、愛と赦しの神様ではなくて、厳しい目をして、鞭を持って見張っている裁判官に見えてきました。 信仰から喜びが消えていきました。

『これは本当の信仰ではない。』

とその事に気付いた信徒さんが、パウロの許に知らせに行ったのです。 パウロはその情況を聞いて、これはキリスト信仰を骨抜きにする、危険なものだと感じました。

『キリストのみ、信仰のみの救い』

その理由を書いて持たせたのが、ガラテヤの信徒への手紙です。

今朝の聖書箇所には、律法が果たした役割、それに優るイエス・キリストの救いについて、パウロの説明が記されています。 15節に、

「**兄弟たち、分かり易く説明しましょう。人の作った遺言でさえ、法律的に有効となったら、だれも無効にしたり、それに追加したりはできません。**」

と言っています。 パウロは遺言の法律的な効力について、語り出していますが、何を言いたいのでしょうか。 神様の人類救済のご計画は、律法が与えられる前に、先祖アブラハムに約束されたことであり、それは**遺言以上の、効力**を持

つと言う事を説明しようとしているのです。

16節に、

「ところで、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して、『子孫たちとに』とは言われず、一人の人を指して、『あなたの子孫とに』と言われています。 この『子孫』とは、キリストの事です。」

と言っています。 神様は創世記に記されています通り、アブラハムに繰り返し祝福の約束を語っておられます。 その中で創世記13章15節と、17章7節の子孫は単数で、その特定の**子孫こそ、イエス・キリストだ**と言っているのです。

パウロは神様が、アブラハムを祝福されたその目的は、その子孫に、救い主イエス・キリストが誕生され、救いが全世界に広がって行くことなのだと言いたいのです。

そこで、パウロは、17節に、

「私が言いたいのは、こうです。
『神によってあらかじめ有効なものと定められた契約を、それから430年後にできた律法が無効にして、その約束を反故にすることはない』
と言うことです。」

と言っています。

出エジプト記12章40節には、

「イスラエルの人々が、エジプトに住んでいた期間は430年であった。」

とあります。 そこから出エジプトを果たし、シナイ山麓まで導かれて、そこで律法は与えられました。 人間の遺言でさえ、だれも無効にしたり、それに追加したりはできないのです。 まして神様の約束に、律法が取って代わることは出来ません。 神様の約束であるアブラハムの特定の子孫として、この世に誕生されたイエス・キリストによって、神様の祝福の約束、人類の永遠の滅びからの救いが成就したのです。

では、律法は何の為に与えられたのでしょうか。 ガラテヤ3章19節に、

「では、律法とは一体何か。 律法は、約束を与えられたあの子孫が来られる時まで、違反を明らかにするために付け加えられたもので、天使たちを通し、仲介者の手を経て制定されたものです。」

と説明されています。人間は神様から離れた為に、何が真に正しい事か、何が罪なのか分からなく成りました。パウロはローマ書5章13節で、

「律法が与えられる前にも罪はあったが、律法が無ければ、罪はつみと認められないわけです。」

と言い、ローマ書7章7節で、

「律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。 たとえば、律法が 『むさぼるな』 と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。」

と言っています。

この様に律法は、罪が何たるかを教える為に与えられたものです。 そこで、もう一つの問題が出て来ました。 3章21節に、

「それでは律法は神の約束に反するものなのでしょうか。」

と言う問題です。 それに対してパウロは、

「決してそうではない。」

と言っています。

「万一、人を生かすことができる律法が与えられたとするなら、確かに人は律法によって義とされたでしょう。」

と言っています。 ところで、万一と言う言葉を使う場合は、そこで言おうとする仮定の事柄は、

「あり得ない」

と言う時に使います。 パウロがローマ書で、繰り返し言っていることは、

「人は律法によっては、神様に義、それで良し、正しい、合格とは、決して認められない」

と言う事です。

律法が果たした事について

3章22節に、

「聖書は全てのものを罪の支配下に閉じ込めたのです。 それは神の約束が、イエス・キリストへの信仰によって信じる人々に与えられ

るようになるためでした。」
と言っています。 律法を記している聖書は、全ての人に、罪を教える事によって、罪の無い人間はいない事を明らかにすると同時に、すべての人を罪の支配下に置くことになりました。 しかし、それは絶望ではないのです。 神様の、アブラハムへの祝福の約束である、イエス・キリストへの信仰に依って、信じる人々に神様の義が、与えられる様になるためだったのです。

神様は愛する独り子、イエス・キリストを人類の罪の贖いの為にお与えになりました。 これ程尊く**高価な愛はありません**。 人はその価値も分からないで、当たり前の様にそれを受けて良いものでしょうか。 そんな事があってはなりません。人間は**自分の罪の重さを知るべき**です。 **律法**とは、その**罪を知らせる**役目をしたのです。

3章24節に、
「**こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。**」
とあります。 律法によって、罪が示された事により、悔い改め、ただ、イエス・キリストに、全信頼してイエス・キリストを信じたのです。 神様はそれで、**信じる者を義**とし、良しとして下さったのです。 イエス・キリストによって、この信仰が現れた今、最早律法と言う養育係の許のいる必要はありません。 パウロの宣言はこうです。
3章26節に、
「**あなた方は皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて、神の子なのです。 洗礼を受けてキリストに結ばれたあなた方は皆、キリストを着ているからです。**」
と言っています。

キリスト者は聖書を通して、自分が造り主である神様に背き、自分勝手に生きて、その人生が如何に罪深いものか、その罪は自分で償えるものでは無く、永遠の滅びに向かっていたということを知りました。 イエス様はこの様な価値無き者の罪を引き受け、身代わりの十字架に架かって罪を贖って下さったのです。 このイエス様の愛に、全信頼して、イエス様を信じ、**イエス様に結ばれるため**に洗礼を受けるのです。 ここでの洗礼は、全身水に沈める洗礼を表現しています。イエス様と共に罪に死んで、水から上がる時は、イエス様によって生かされ、イエス様の義の衣を着せて頂くのです。そして、 神の子の身分が与えられ、天にその名が記されるのです。

そこで、パウロは、3章29節で、はっきりと宣言しています。
「**あなたがたは、もしキリストのものだとするなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。**」
アブラハムに約束された祝福の相続人、それは、ただ、イエス・キリストに全信頼して、ただ信じ委ね、神様に義と認められ、神の子の身分が与えられた者のことです。 私達も日毎、聖霊によって罪を示され、日々悔い改め、イエス様に全信頼して、キリストのみ、信仰のみ、に立って、生けるイエス様を見上げ、**神の子の身分に喜び溢れ**、信仰を全うして行こうではありませんか。

お祈りを致します
憐れみ深い天の父なる神様

御子イエス・キリストの十字架の贖いに寄る救いを、ただイエス・キリストを信じるだけでお与え下さる、この絶大な恵みを、心から**感謝**します。

恵みが余りに大きくて、信じることが出来ない愚かさに陥るものです。 人間の考えで、キリストのみ、信仰のみの御救いを決して疑うことなく、一途にイエス・キリストを信じ、神様の**祝福の相続人とならせてください**。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。